

# 「英語で読む力」とその育て方

池野 修

(愛媛大学)

## 1. 英語教科書の「本文」の役割

中学校英語教科書は、各レッスンの「本文」を中心に編集されており、「本文」は様々な役割を担うことが期待されている。主には次の3つである。

- (1) 新しい言語材料の導入および既習の言語材料の強化：本文とは新出文法・語彙を導入するための手段(carrier)であり、また音読、筆写、シャドーイングといった英語を「取り込む」活動の対象となる素材である。言語形式の導入・強化をねらいとしているという意味で、“language text”(text for grammar and vocabulary acquisition)とも呼べる。
- (2) 読解力の養成：英文を読んで理解する力を養成するための手段。その本文の理解自体が目的ではなく、その学習を通して、「初見の英文」を読んで理解する力をつけるためのトレーニング素材である。読解力をつけることが主目的であるため、“reading text”(text for reading skills training)と呼べるかもしれない。
- (3) 思考力・感性の涵養(大きくは人間的な成長の促進)：知的・精神的成長にとって意味のあるメッセージ内容を読み、それについて考えることを通して「心」を育てる。多少不自然な英語表現かもしれないが、“text for mind and heart enrichment”と言える。

以下の論考では、(1)の文法・語彙の導入・強化という本文の役割の議論は他に譲り、(2)のリーディング能力のトレーニングという役割を中心に、リーディング能力の中身、それを育成するために「本文」に求められる特徴、リーディング指導のあり方について考えてみることにしよう。なお、対象とな

る学習者としては、主に中学校2年生後半～3年生を想定している。

## 2. 「リーディング能力」とは

「読む力」とは何か — 読みには様々なタイプがあり、包括的な概念規定を行うのは難しいが、「物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること」(新学習指導要領)などが、読解(reading comprehension)の中核部分を押さえた一般的な定義であろう。

構成要素に分けて考えてみると、リーディングは、文字を認識し、(音声再符号化を経て)単語を認定するといったミクロなレベルから、文と文の間にある論理関係を読み取ったり、書き手の意向を理解したりというマクロのレベルまで様々なプロセスから成っている。教育実践上は、次のような力(サブ・スキル)が特に重要であると考えられる。

### (a)素早く正確に文字・単語を認識できる力

最も基本的な技能であるが、例えば、THIS IS DIFFICULT という表記のメッセージが通常の間である This is difficult より読みにくいように、自動化された(=意識することなく、高速で行われる)文字認識は極めて重要である。この力を養成するためには、基本的に、頻出語彙に繰り返し触れることが必要であり、多読(量をこなす)なども効果的であろう。すでに内容の分かった英文(e.g. 1学年前の教科書)を何度も繰り返し読むこと等も有効と考えられる。

### (b)豊富な受容語彙(receptive vocabulary)

「単語の意味さえ分かれば英文は読める」というのは短絡的な誤解であるが、読解において、語彙力(目で見て意味の分かる単語=視覚受容語彙)は、おそ

らく最も重要な(比重の大きい)要素である。語彙知識の「量」(=いくつの単語を知っているか)はもちろんだが、その「質」(e.g. 頭の中にある辞書からどれだけ効率的に意味を引き出せるか、文脈に合う語義を選べるか)も問題になる。

### (c) 英語の語順で意味を取る力

英語の発想の流れに沿って、提示される順序で文法構文・表現を処理する力を示す。返り読みをできるだけせずに、スラッシュ(/)等で英文をセンス・グループに切りながら読み下すような指導も有効である。また「英語の語順での理解」という観点から文法説明や訳語を再構築することも考えてみたい(例えば、“such as …”の訳語は「…のような」ではなく「例えば…」にする etc.)。

### (d) 指示語の読み取りの力

it等の代名詞は言うに及ばず、(中学校ではあまり出てこないかもしれないが) the other (→「残りの1つ」って何?), this idea (→「どんな考え?」), the country (→「どの国?」)など、様々な表現が対象となる。あまり注意せずに読み飛ばしてしまう可能性もあり、文章の正確な理解、文間の意味の統合(以下(e)も参照)が妨げられてしまう場合もある。

### (e) 単文の意味を統合して文章全体の意味を取る力

よく用いられる比喩を使えば、「一本一本の木を見るだけではなく、森の全体像を捉える」力と言える。一文ごとには理解できているつもりでも、「どんな内容のことが書かれていた?」とたずねられると回答に困ることがあるのは、文と文の間の意味が効果的に統合されていないことが主な原因である。ある程度の長さの英文を読む場合には、文章全体との関係を意識しながら各部分を読んでいく、区切り・まとめりごとに読み取った内容を頭の中で簡単に言ってみる(silent summarizing)なども有効であろう。

近年では、リーディングを「読解」(=書かれている情報の読み取り)に限定せず、より超領域的で総合的な行為とみなす立場もある。言及されることの多い「PISA型読解力」は、リーディング能力について、“Reading literacy is understanding, using, and reflecting on written texts, in order to achieve one’s goals, to develop

one’s knowledge and potential, and to participate in society.”(自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力)と説明している。つまり、リーディング(能力)には文章に書かれた「情報の取り出し」だけではなく、その「評価」や「活用」が含まれる訳である。また、PISA型読解力では、文章だけではなく、図表などの非連続型テキストも読みの対象となることも確認しておきたい。

新学習指導要領にも、PISA型読解力の「活用」「評価」に対応するような記述が含まれている。

(i) 伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し、適切に応じること。

→現実世界での読み(real-world reading)を意識し、書かれている(読み取った)内容に回答する。意味ある流れの中で、「読む」を他の技能(主に「書く」と統合する。

(ii) 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。

→ただ漠然と読むのではなく、「感想を述べるために読む」など、読後の行為を念頭において読む。また、読み取った内容について、「自分はどうか考えるのか」を述べる・書く(評価読みを行う)。

このような「リーディング能力」の構成要素を意識しつつ、多角的にリーディング指導を行っていくようにしたい。

## 3. リーディング能力を高める指導

リーディング能力を養うための指導の原則について、以下で考察してみよう(なお、中学校という英語学習段階では実現が困難なもの、時間的制約などから実施が無理な内容もあるかもしれない)。

(1) 読みの絶対量を増加させる。言うまでもないが、リーディングに限らず言語習得には膨大な量の目標言語との接触が必要とされる。絶対量を増加させるためには、生徒が読みたくなるような題材を多く準備し多読を促す、既習の教科書英文を何度も読ませる等の工夫が必要である(後者の場合、それが

「再読に値する内容の英文かどうか」という視点も重要になる。

(2) まとまった分量の英文を読むことに慣れさせる。全体的に、中学校教科書に掲載されている英文(1授業時間にこなす、教科書1ページあたりの英文)はreading textとしては短いように感じられる(これは、「本文」が読解トレーニングだけではなく、新出文法の導入という、もう1つの大きな目的を担っているためでもあろう)。中学校での到達目標として、例えば「基礎的な英語で書かれた、少なくとも250語、できれば300語程度の英文を読んで、その概要やあらすじを理解することができること」などを設定する場合、少なくとも中学3年次では、もう少し長い英文(レッスン本文を含む)でトレーニングを行うべきと考えられる。

(3) 読みの目的を明確にする。できるだけ「真真正な(authentic)」ねらいを設定する。読むことそれ自体が目的である場合もあるが、可能な限り、「なぜその英文を読むのか」、その必要性や意義を生徒が実感できるようにしたい。ターゲットとなる英文を読む前に、読みの状況設定、目的設定をどう行うかがキーになるはずである。

(4) 実践的な読み物を含む様々なタイプのテキストを読む。実践的な読みとは、現実世界で実際に行う読みの活動(real-world reading activities)、例えば新聞や手紙を読むという行為を示すが、現在までは、教科書本文の読みがこれらの読みとどう関係するのかという視点が希薄であったのかもしれない。実践的な読みの素材のみを扱うことは、言語習得の促進や知性・感性の涵養の観点からは問題があるとも考えられるが(後述の議論を参照)、「学習者が現実世界で目にする可能性の高い英文→それを模した教材の開発」という発想はもう少し取り入れても良いであろう。

(5) 読解発問に関して、概要を問う質問については、その設問への答えが英文の要約にもなりうるように、内容や配列を工夫する。また、「このメッセージを読む場合に、きちんと押さえておかなければならない情報は何か、どのような情報をチェックするのが本来的か」という観点から、関連の質問を優先的に作るようにする。なお、英語授業における発問

については、包括的な解説と豊富な具体例が『英語教師のための発問テクニック－英語授業を活性化させるリーディング指導』(田中武夫・田中知聡、大修館書店)にまとめられているので一読されたい。

(6) 様々なリーディング活動の中から、ねらいに応じて適切な活動を選択する。例えば、活動のレパートリーの中には次のような活動も含まれる。

・ **Picture Drawing** : 事物や状況が描写されている箇所を対象に、英文から読み取った文字情報を視覚的情報へ転換する。

・ **Table / Figure Completion** : (i) 読み取った内容を基に表を完成させる(例えば、「比較・対照」の構造が見られる文章内容に対しては有効と考えられる)、(ii) アウトラインのフローチャート(空欄を含むもの)を完成させる、(iii) 四角や楕円形のボックスを用いて本文のキーワード(キー概念)の関係を図解する(=マッピング)など、様々な形をとりうる。

・ **Picture-Sentence Matching** : 教師によって提示された絵を見て、文章中のどの文に対応しているかを考える。

・ **Paragraph-Summary Matching** : パラグラフのメイン・アイディアに関連するフレーズやパラグラフ内容を短くまとめた文を見て(教師が提示)、どのパラグラフに対応しているのかを考える。

・ **Summarizing** : 読み取った内容を簡潔に表現し直す(英語/日本語)。教師が準備した要約文の空欄埋め～生徒による要約文作成まで、活動自由度の適切なレベルを判断して実施する(徐々に自由度を高めていくことも可能である)。

・ **Story Retelling** : 読み取った内容を、キーワードや関連の絵を手がかり(cue)として英語で再生する。話してretell, 書いてretellが考えられる。

・ **Peer Questioning** : 文章内容について生徒同士で質問し合う。教師が質問リストA/質問リストBを作り、インフォメーション・ギャップ活動にしたり、習熟度が高くなれば、生徒が自分で質問を作ることも検討してよいかもしれない。

・ **Personalization Questions** : 「最も印象に残る文を1つ選ぶとすればどれですか、なぜですか」「文章を読んで興味深いと感じた事実を2つ書き出

してみよう」「日本と違うと思ったところはどこですか」「賛成するところは黄色のマーカーで、反対するところはピンクのマーカーで塗り分けてみよう」などの質問を提示して、読み取った英文内容について考えさせる、情報を吟味させる。

・**Creative Interpretation**：口語体の独白メッセージや会話については、読み取った内容を、翻訳家のように、あるいは自分が普段使っている日本語表現（方言、若者言葉）を用いて、意識してみる。

・**Oral Interpretation**：読み取った意味を効果的に口頭で表現し、発表する。この表現読み・朗読を行う準備過程で、筆者の意図や想い、メッセージの真の意味などを繰り返し吟味することになり、英文の理解が深まることも期待される。

・**Opinion Writing**：英文の内容について、意見を書く（自分の率直な思いを述べたり、あえて反論したり、与えられた立場から意見を述べたりする）。

これらの活動の内、特に後半のいくつかは、新学習指導要領でも強調されている「評価」「活用」にも関連するポスト・リーディング活動である。逆に、「評価・活用に適した文章とはどのようなものか」という視点から英文教材開発を行うことも考えてみたい。例えば、「意見表明活動 (e.g. opinion writing) を行うのに適した英文」とは、反論したくなるような内容が含まれている、文中に読者への問いかけの質問が入っている、そのモデル文の一部を置き換えれば自分なりのメッセージを作れるようになっている、などの特徴を持つ文章であろう。

(7)「テキストタイプに応じた読み」になっているかどうかを確認する。同一のテキストに対して、単に多様な活動を実施すれば良いという訳ではない。例えば、説明文・論説文と物語文では行うべき活動も違って来るはずである。さらに別例をあげれば、メール文は普通音読することはないし、番組表、ウェブページなどの情報検索読み (scanning) の対象となる文章は、最初から最後まで読み通すのではなく、必要な情報のみを読み取るのが普通である。授業活動の全てを実社会で行う活動 (real-world tasks) の模擬活動にすべきという意味ではないが、「そのタイプの文章に対して、そのような活動を行うのが自然・適切なのか」という点は考えてみたいところ

である。

#### 4. リーディング指導を通じた思考力・感性の涵養

従来から言われているように、学校教育における英語科教育には、「技能習得 (skill acquisition)」と「人格陶冶 (personal enrichment)」の側面がある。英語力や英語リーディング能力を向上させることに加えて、生徒の思考力や感性を育てることにもつながる英語教育であることが理想である。このねらいを達成する上では、4技能の中で特にリーディングが果たす役割は大きく、指導にあたっては、まず読みの素材、“what to read”をよく吟味するようにしたい。「身近な」題材や読解スキル養成のための素材は、もちろん重要ではあるが、必ずしも生徒の深い思考を促す内容ではない場合がある。この点に関して、室井美稚子氏は、(ご自身の指導経験に基づいて)「TOEIC 対策などで高度にプラクティカルなものを読ませることもあるのですが、そこには生徒の心に響いてくるような内容はありません。リーディング・スキルを伸ばすことは重要ですが、生徒の精神的な発達段階を考えると、無味乾燥なものを読むだけで勉強が終わってしまうのは寂しいと思います。」(Teaching English Now Vol.12, 2008) と述べている。実践的なテキストだけでなく、生徒の感性を刺激したり、深い思考を誘発したりするような内容を持った英文もやはり重要である。

優れた英文はそのメッセージ自体が持つ力が大きいのは確かであるが、その素材をどう料理するか(=指導法)を工夫することも考えたい。まず、教師自身が英文のメッセージ内容に思い入れを持ち、前述の Personalization Questions や Opinion Writing なども活用しながら、生徒がメッセージ内容を深いレベルで感じ取ったり、それについて考えたりする活動を構想・実践していかなければならない。

ただし、思考力・感性の涵養のためのリーディング活動といっても、日本語で行うことに終始するのはやはり問題であり(日英語比較を通してことばへの気づきを促すような活動は別として)、英語の習得と関連づける形で、少しでも良いから英語で意見を聞いたり、書いたり、話したりする活動を通して行うようにしたいところである。